

生活習慣に関連した物的環境に対する乳児の探索行動

—保育園0歳児クラスにおける生活習慣導入とのかかわりから—

佐藤 すず*

Infants' Exploration of Physical Environment which Relates to Life Habits:

Relation to Introduction of Life Habits in a Day-Care Center

Suzu SATO

Abstract

The purpose of this study is as follows. First, to reveal the way of infants' exploration of physical environment which relates to life habits in a day-care center. Second, to analyze relationship between infants' exploration and introduction of life habits by nursery teachers. Six infants who belong to a class of first year of life were observed for 7 months. Observation focused on infants' exploration of physical environment which related to washing-hands habit and clean-up habit, namely, tap and sink for washing-hands habit, and shelves and baskets for clean-up habit, respectively. Infants weren't interested in tap or sink at all before nursery teachers introduced washing-hands habit, but infants were interested in and started exploration of tap and sink thereafter. Similarly, infants weren't interested in shelves or baskets at all before nursery teachers introduced clean-up habit, but infant were interested in and started exploration of shelves and baskets thereafter. Infants seemed to discover their own meaning of physical environment which related to life habits. The results suggest that introduction of new life habit trigger infants' exploration of physical environment which relates to the life habits.

Keywords: exploration, physical environment, life habits, infant, a class of first year of life

1 序論

近年、保育ニーズが増大する中で、保育園・幼稚園において子どもが生活習慣を習得していくことは、重要な課題とされている。そうした中で、保育園・幼稚園における生活習慣については多くの研究がなされているが、それらの多くは、子どもの生活習慣の習得についてどのように援助、指導するのかといった大人の観点からの方法について主に検討されている(例えば、熊澤 2005;村上 2012;内藤・山内 2012)。

キーワード：探索行動、物的環境、生活習慣、乳児、0歳児クラス

* お茶の水女子大学大学院博士前期課程 2016年度修了

しかし、子どもの視点に立ち、子ども自身がどのように生活習慣とかかわっているのかという、子どもの側に焦点を当てた研究も同時に重要であると考えられる。

生活習慣について、子どもの側に焦点を当てた研究はいくつか行われている。永瀬・倉持(2011)は、3歳児クラスの片付け場面における観察から、自発性を本質とする遊びと生活習慣習得との関連性を検討し、遊びから片付けへ移行するためには、子どもたちが片付けの前に遊びを満足して終わられること、片付けに楽しみを見出せることが必要であると明らかにした。大戸・柴坂・狩野・佐藤・武居(2007)は、保育所の2歳児クラスのトイレ使用時における子どもの実態調査を行い、子どもたちが排泄行為を成し遂げるために20ものハードルを越えている実態を報告した。その前段階となる1歳児クラスの子どもたちに焦点を当てた藤本・大戸・柴坂・狩野(2008)は、オムツ使用からトイレで排泄するまでに子どもがどのような過程を辿るのかを明らかにしている。この他にも、子どもの側に焦点を当てた研究はいくつか行われている(例えば、永瀬・倉持 2012; 平野 2014; 平野・小林 2015)。しかし、それは主に3歳以上の子どもを対象にしたものであり、大戸・柴坂・狩野・佐藤・武居(2007)や、藤本・大戸・柴坂・狩野(2008)の排泄に関する研究のような、3歳未満児の研究は極めて少ない。

3歳未満児は、3歳以上の子どもに比べ、生活面において保育者からの世話を依存する程度が大きいだろう。その一方で、中田(2013)は、3歳未満児でも自分から移動して興味を引くものに近づき、子どもなりの仕方ですれと関わるといった探索行動が多く見られるという。中田(2013)はさらに、こうした探索行動によって、子どもはどこにどのようなものがあるかわかるようになったり、それらに触れたり握ったりといった身体的な関わり方を身につけるようになっていくと述べている。つまり、3歳未満児においても、自発的な探索行動を行うことで身のまわりの生活習慣に関連した物的環境(例えば、手洗い習慣であれば物的環境は水道等)に近づき、自分なりのかかわり方を身につけていくことがあると予想される。

3歳未満児は生活習慣を習得して自立する段階には至らないと考えられるが、保育者の援助を受けながら生活習慣を行うようになることは十分に考えられる。生活習慣が導入され保育者に援助されながら生活習慣を行うようになることと、生活習慣に関連した物的環境に対する探索行動とは、何かかかわりがあるのではないだろうか。

そこで、本研究では、生活習慣に関連した物的環境に注目し、生活習慣に関連した物的環境に対する0歳児クラスの子どもの(入園時に1歳未満児)の自発的な探索行動が、保育園における生活習慣の導入とどのようにかかわっていると考えられるのかを検討した。0歳児クラスの子どもの対象とするのは、この時期は徐々に生活習慣が導入されるとともに、周りの物的環境に関心をもちそれに近づいて探索行動を始める時期でもあり、本研究の目的を検討するのに適していると判断したためである。

2 方法

2.1 調査方法

本研究では、東京都内のある認可保育園(以下 M 保育園)における0歳児クラスの子どもの6名を対象に観察を行った。観察は、2016年4月から10月にかけて週1回程度行った。観察日数は24日であった。対象児の日常生活における自発的な探索行動に焦点を当てるため「自然観察法」(柴山,2006)を用いた。また、観察の際は「消極的な参与」(柴山,2006)の立場を取った。対象児の朝おやつから降園までの約8時間、生活の様子を観察した。園での生活習慣として手洗い習慣・片付け習慣の2つを選定し、これらの生活習慣に関連する物的環境に対する子どもの自発的な探索行動に焦点を当てて観察を行った。手洗い習慣・片付け習慣を選定したのは、これらが M 保育園0歳児クラスに導入された習慣であり、関連した物的環境が対象児のかかわりやすい位置・状況にあったためである。

また、生活習慣習得の状況などわからないことの確認のため補足的に担任保育者2名にインタビューを

行った。その際、観察をしながらタイミングを見てフィールドの人々から聞き取りを行うインフォーマル・インタビューの形をとり、保育を妨げないよう判断しながら適宜簡単な確認を行った。

2.2 基本概念

①生活習慣

松田(2006)によると、生活習慣とは「人が生きていく上で必要な行為の中で習慣化された行為」であり、その中でも特に、人間の生理的欲求を満たし生きるために必要な「食事」「排泄」「睡眠」、人間が快適に生活するために必要な「着脱衣」「清潔」の5つを基本的な生活習慣と呼ぶ。ここで、「片付け」の習慣は、生命維持に直接かかわる習慣ではない点で基本的な生活習慣の5つとは異なる。しかし、内藤・山内(2012)は、片付けは幼児の基本的な生活習慣の確立が目指される幼稚園、保育所において、どの園でも毎日行われる園生活には不可欠な活動の一つであるという。そこで、本研究では、基本的な生活習慣に加え片付けも生活習慣として扱うこととする。

さらに、本論文における生活習慣の「導入」という言葉について定義しておく。柴坂・倉持(2004)は、幼稚園入園後1か月ほど経って、園生活に慣れたところに初めてお弁当という習慣を保育者が入れ込むという意味で「導入」という言葉を使っている。本研究では、柴坂・倉持(2004)の研究を参考に「今まではなかった習慣を保育者の意図で途中から入れ込む」という意味で「導入」という言葉を用いる。

②探索行動

探索行動には、様々な定義やアプローチの方法がある。その中で、中田(2013)は、子どもの側から探索行動を捉えた上で、探索行動とは8か月頃になりハイハイができるようになると自分から移動して興味を引くものに近づき、子どもなりの仕方ですれと関わる行動であると定義している。本研究では、子どもの側から探索行動を捉えるという視点から、探索行動は子どもが自発的にものにかかわる行動であるとの中田(2013)の指摘を重視する。そこで、本研究における「生活習慣に関する物的環境に対する探索行動」とは、生活習慣に関連した物的環境に関心を持ち何らかの仕方ですれにかかわっている行動すべてを指すこととする。

2.3 事例分析

収集した事例数は全部で39事例であった。子どもごとの探索行動の事例数を表1に示す。なお、子どもは月齢の高い順番で記す。事例数は探索行動に関連した生活習慣ごとに記した。

表1 子どもごとの探索行動の事例数

	探索行動の事例数	
	手洗い習慣	片付け習慣
K児(女児)	3	1
H児(女児)	6	4
S児(男児)	3	10
E児(男児)	8	2
M児(男児)	1	0
R児(男児)	1	0
計	22	17
	39	

全 39 事例の中から、手洗い習慣については、探索行動の事例数が多い H 児(6 事例)・E 児(8 事例)の事例の一部を取り上げた。また、片付け習慣については、探索行動の事例数の多い S 児(10 事例)の事例の一部と、探索行動の事例は 1 つだけであるが、片付け行動が多く観察された K 児の事例を取り上げる。M 児・R 児については、比較的月齢が低く、観察期間中に探索行動を行う様子がほとんど見られなかったため、今回は分析対象とはしなかった。

分析においては、子どもごとに分析対象の事例を時系列で並べた。生活習慣の導入時期や生活習慣習得状況と合わせて、各生活習慣の導入とその生活習慣に関連した物的環境に対する探索行動とのかかわりについて検討した。

3 結果と考察

3.1 手洗い習慣に関連した物的環境に対する探索行動～H 児・E 児の事例から

4 月の入園当初、M 保育園 0 歳児クラスでは、食事(朝おやつ・昼食・午後おやつ)前には、保育者がおしぼり(各家庭から持ってきてもらったもの)を濡らして子どもの手を拭いており、水道での手洗い習慣はなかった。しかし、担任間での話し合いの結果、4 月の 3 週目以降、衛生面を考慮して食事前、さらに散歩後において、保育室内にある水道での手洗い習慣を導入することになった。保育者が後ろから子どもの手を持ち、その手を合わせるようにして洗う。手洗い後は、各家庭から持ってきてもらった個人の手拭きタオルで手を拭く。よって、手洗い習慣に関連した物的環境は、保育室内の水道と手拭きタオルとする。

以下では、H 児・E 児の手洗い習慣に関連した物的環境に対する探索行動の事例の一部を取り上げる。なお、事例を提示する際、事例の冒頭には日付と事例の対象児の月齢を示した。また、事例内の記述の下には記述で下線を引いた部分に対応する動作等を図示した。

3.1.1 水と関係のある部分に特化した探索行動が特徴的な H 児の事例

ここで取り上げる H 児は、手洗い習慣導入前、手洗い習慣に関連した物的環境に興味を示す様子は見られていなかった。しかし、4 月 3 週目に入って手洗い習慣が導入されると、H 児は手洗い習慣に関連した物的環境に対して探索行動を始めた。

事例 1

2016 年 5 月 10 日 1 歳 1 か月

15 時 41 分、午後のおやつを食べ終わった H 児は保育室の床に座って玩具で遊んでいたが、それを止めてはいはいで水道のほうに向かう。水道の縁に両手でつかまり立ちをすると、右手を離して蛇口にもっていき、その先端部分を下から包むような形で触る。真剣な表情で 30 秒ほど触り続けた。



【図 1 下線：H 児が蛇口の先端を触る様子】

H児は蛇口の先端に特化して探索行動を行っている。0歳児クラスの保育室内の水道は、3回の食事前の手洗いに加え、散歩後の手洗いや、保育者がテーブル拭きや食事後に子どもの手と口を拭くおしぼりを濡らすのに使うため、蛇口の先端や排水部分などは常に濡れた状態である。このときも、直前の午後おやつの手洗いで水道を使っており、蛇口の先端には水滴が付いていた。よって、これは蛇口の先端に水滴が付いていることに興味を示したための行動ではないだろうか。

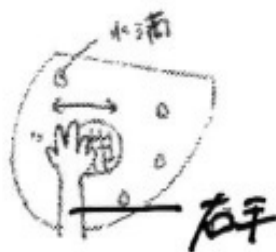
佐々木(2008)は、その場に跡が残るといことが行為を促したり、続けたりすることのきっかけになるという。佐々木(2008)は、その例として、次のような実験を挙げた。1歳半から3歳の子どもにかけない、すなわち跡が残らない鉛筆を持たせ、かき続けるかどうかを観察すると、子どもたちはかくのを止め、普通にかける鉛筆を求めたという。

水は、触った手や触られた部分に跡を残す。H児が水滴の付いた蛇口の先端に触ることで、H児の手には水滴の跡が残る。さらに、蛇口の先端に付いた水滴も、H児が触ることで形を変えて跡を残す。H児は、このような水滴の跡から、水滴が付いた蛇口の先端に興味を持ち、探索行動を促されたのではないだろうか。

事例2

2016年6月6日 1歳2か月

14時46分、午睡から目が覚めたH児は、布団から出て水道に近づき、両手で水道の縁につかまり立ちをする。右手で水道の排水部分を左右に触る。水道には水滴がついており、H児の手が濡れたようであった。



【図2 下線：H児が水道の排水部分を触る様子】

H児は排水部分に特化した探索行動を行っている。水道は濡れており、排水部分にも水滴が付いていた。すなわち、排水部分に触ったH児の手には水滴の跡が残る。また、排水部分に付いていた水滴は、H児が触ったことで形を変えて跡を残す。H児は事例1同様、ここでも水滴の跡から水滴の付いた部分に興味を持ち、水滴の付いた排水部分に特化して探索行動を行ったのではないだろうか。

3.1.2 水が流れる順番に特化した探索行動が特徴的なE児の事例

事例3

2016年4月21日 8か月

朝の自由遊び中。9時58分、E児ははいはいして水道に近づき、水道の縁部分に両手でつかまり立ちをする。右手を離し、その手でレバーの丸い部分を握る(1)。次に蛇口のカーブした部分を握り、その手を上下に滑らせるようにする(2)。その手を排水部分にもっていき、左右に動かす(3)。



ここでは E 児の探索行動の順番に着目した。E 児は「レバーの丸い部分→蛇口のカーブ部分→排水部分」という順番で探索行動を行っている。これは、「レバーを上げると→蛇口から水が出て→排水部分に流れていく」という水道のレバーを上げてから水が流れるまでの順番に探索行動を行っているのではないだろうか。E 児は、水道での手洗いを経験したことによって、レバーを操作すると水が出てくるらしいということや、そうやって出てきた水がどのような順番で流れるのかに気が付いたのかもしれない。

事例 4

2016年6月9日 10か月

15時25分、おやつを食べ終わった E 児は、テーブルを離れて水道に近づいていく。水道の縁部分に両手をつかまり立ちをし、右手で蛇口のカーブ部分を握る(1)。そのまま蛇口の先端をくわえようとする(2)が、保育者に「E くん、食べないで」と止められる。すると、蛇口をくわえようとするのを止め、今度は右手で排水部分を左右に触る(3)。



事例 3 から、E 児は水道から水が流れる順番や、レバー操作をすると水が流れることに気付いていることが推察された。今回の事例 4 では、E 児は「蛇口のカーブ部分→蛇口の先端→排水部分」という順番で探索行動を行っている。やはり E 児は「蛇口を水が通って→先端から水が出て→排水部分に流れていく」という水道から水が流れていく順番に探索行動を行っているのではないだろうか。

3.1.3 考察：手洗い習慣の導入と手洗い習慣に関連した物的環境に対する探索行動とのかかわり

H 児・E 児に共通して言えるのは、手洗い習慣導入後に水道に対するかかわり方が変化しているということである。H 児・E 児には 2 人とも、手洗い習慣導入前は手洗い習慣に関連した物的環境に対して興味を示す様子は見られていなかったが、手洗い習慣が導入されると、手洗い習慣に関連した物的環境である水道に対して興味を示し、探索行動を行い始めた。

探索行動の内容はそれぞれに特徴が見られた。H 児は、水滴の付いた蛇口の先端や排水部分に特化して探索行動を行っている。このような探索行動から、H 児に水道に対して水と関係のある場所だという認識

ができたと考えられる。E児は、探索行動の順番から、レバーを何か操作すると水が流れるらしいということ、さらに、その水が流れていく順番にも気が付いたと考えられた。このような探索行動から、H児同様、E児にも水道に対して水と関係のある場所だという認識ができたと考えられる。

以上から、手洗い習慣の導入と手洗い習慣に関連した物的環境に対する探索行動とのかかわりについては、手洗い習慣が導入されることで、手洗い習慣に関連した物的環境自体に興味をもって探索行動を始めると考えられる。そのような探索行動を繰り返し、水道に対して水と関係のある場所だという認識ができていくようである。水滴への興味や水道の操作、蛇口から出た水が流れる順番等、探索行動の内容は子どもごとに異なっており、それぞれの子どもがそれぞれの意味を見出して探索行動を行うことが考えられる。

3.2 片付け習慣に関連した物的環境に対する探索行動～S児・K児の事例から

入園時から6月中旬ごろまでは、子どもが遊んだ玩具を片付けるのは主に保育者であった。それが、6月下旬ごろから、保育者が子どもに「○○くんお片付けして」「お片付けだよ」というような声掛けをする様子が盛んに見られるようになった。保育者が「この日から片付けを導入する」と明確に意識してのことではないようだが、本研究ではこのころから片付けが導入されたと考える。片付けは、次の活動に移る際、または、玩具を入れ替える等保育者が判断した際に、保育者が子どもに対して促す、子どもは片付け用のカゴ類に玩具を入れ、保育者が玩具の入ったカゴ類を片付け用の棚類に入れるという流れで行われる。よって、片付け習慣に関連した物的環境は片付け用のカゴ類と片付け用の棚類とする。

以下では、S児・K児の片付け習慣に関連した物的環境に対する探索行動の事例の一部を取り上げる。なお、事例を提示する際、事例の冒頭には日付と事例の対象児の月齢を示した。また、事例内の記述の下には記述で下線を引いた部分に対応する動作等を図示した。

3.2.1 容器としてのカゴへの探索行動が特徴的なS児の事例

事例5

2016年6月29日 1歳1か月

夕方の自由遊び中の17時、保育室内に座って遊んでいたS児は、片付けの棚から片付け用のカゴを引っ張り出して、さかさまにひっくり返した。中に入っていた玩具が床に広がったが、玩具を手にはせずS児は立ち上がり、床に置いていた片付け用のカゴに右足を入れる(1)。左足も入れようとする(2)が、バランスがとれなかったのか、片付け用のカゴに足を入れるのをやめ、再び座りこむ。



【図9 下線(1)：S児が片付け用のカゴに右足を入れる様子】



【図10 下線(2)：S児が片付け用のカゴに左足を入れる様子】

片付け習慣導入前、S児には日常的に自分で片付け用の棚類から片付け用のカゴ類を取り出し、そのカゴの中から玩具を取り出して遊ぶ姿は見られるが、片付け用のカゴ類自体に興味を示す様子は見られていなかった。そのため、片付け習慣導入前、おそらくS児にとって興味の対象は玩具のみであり、片付け用のカゴ類は「玩具がある場所」としてのみ認識されていたと考えられる。しかし、片付け習慣が6月3週

目に導入され、その直後の6月29日、事例5のような片付け用のカゴに対する探索行動が観察されている。これは、片付け習慣を経験したことで、カゴ自体への興味が芽生え、カゴが探索行動の対象になったと考えられる。

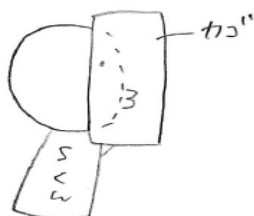
また、片付け習慣導入前のS児には、片付け用のカゴ類に玩具を入れたり、それを片付け用の棚類に入れたりというような行動は見られなかった。このことから、S児が何かを「入れる」という行為や片付け用のカゴ類に対する容器としての認識がなかったと考えられる。片付け習慣導入後に起こったこの事例では、カゴの中に自分の身体を入れている。これは、片付け習慣を経験したことでカゴを「何かを入れる容器」として認識し始め、その確認として自分の身体を入れてみている行動ではないだろうか。

しかし、ここでカゴに入れたのは、玩具ではなく自分の身体であった。どうしてカゴに入れる何かとして自分の身体を選んだのだろうか。S児は、もともと狭い場所に入るのが好きな子どもであった。入園当初から2台のベビーベッドの間に入り込んだり、テーブルの下に潜り込んだりする姿も観察されていた。本間・坂本・渡辺(1995)は、子どもにとって狭い場所には「こころの安定を得る場所」としての意味があるという。S児は狭い場所に入ることで、母親と離れているという不安や、家とは違う園の環境に対する不安を癒そうとしているのかもしれない。そのため、容器としての布製のカゴの存在を認識し始め、「ここには何かを入れられるのだ」ということに気付いたS児は、まず自分の身体を入れてみようと考えたのではないだろうか。保育者も、S児がカゴに入る姿と狭い場所が好きなS児とを関連付けて解釈していた。

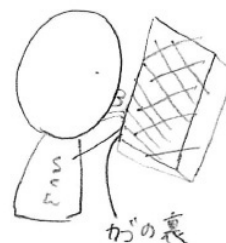
事例6

2016年7月4日 1歳2か月

夕方の自由遊び中である17時15分、保育室内に座って遊んでいたS児は、側にあった片付け用のカゴを両手にもつ。カゴの中に入っていたおもちゃと道具は他児がすべて使っており、カゴは空だった。S児は、カゴの中に顔を入れ、底の部分に口を付けると、顔をカゴから離す(1)。再度カゴの中に顔を入れて底に口を付け、顔から離す(2)。今度は、カゴをひっくり返してもち、カゴの裏に口を付ける(3)。



【図11 下線(1)(2): S児が片付け用のカゴに顔を入れる様子】



【図12 下線(3): S児が片付け用のカゴに口を付ける様子】

今回の事例6では、S児は片付け用のカゴに自分の顔を入れている。これは、事例5同様、何かを入れる容器としてのカゴの存在に気付き始めているための探索行動だと考える。S児は、下線(1)(2)ではカゴに顔を入れたが、下線(3)ではカゴの裏に口を付けていた。これは、容器の「入る部分」と「入らない部分」を確認するための行動ではないだろうか。S児の姿は、下線(1)(2)でカゴに顔を入れた後、「こっちは入るかな」とカゴの裏に口を付け、「こっちは入らないのか」とカゴの「入らない部分」を確認しているようであった。

3.2.2 片付け行動が多く見られたK児の事例

K児は、月齢が高いことなどの影響か、入園当初から保育者の発言の意図を理解して動く姿が見られる子どもであった。また、入園当初から歩行ができていた。そのためか、片付け習慣導入前から片付け時間中においてときどき、保育者がK児のみに片付けを意味する「ないないして」という声がけをすることが

あった。K児もその声がけに応え、片付け行動を行うことがあった。そのようなK児は、片付け習慣が導入されても、片付け習慣に関連した物的環境に対して探索行動を始めるわけではなかった。しかし、片付け習慣導入後、片付け習慣に関連した物的環境に対して探索行動を行う子どもが出てきた中で、K児にも次の事例7のような探索行動が見られた。

事例7

2016年7月28日 1歳3か月

朝の自由遊び中、保育室内には人形などが入っている片付け用の段ボール箱が出ている。このとき、人形はすべて使われており、段ボール箱は空の状態であった。K児は段ボール箱をひっくり返して床に置き、ずりずりと両手で押す(1)。ひっくり返して表向きにすると、またずりずりと押していく(2)。もう1度ひっくり返して裏側にし、押していく(1)。



【図13 下線(1)：K児が段ボール箱を押す様子】



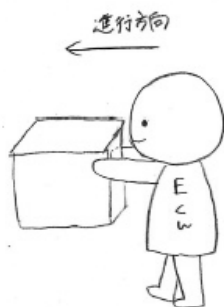
【図14 下線(2)：K児が段ボール箱をひっくり返して押す様子】

4月から片付け経験がありながらも探索行動を行うことはなかったK児が、ここで探索行動を行ったのはどうしてだろうか。その理由として、他の子どもの探索行動の姿を見たことが1つの可能性として考えられる。K児が探索行動を行う1週間ほど前の7月21日、E児が、K児が探索行動を行っていたのと同じ段ボール箱に対して探索行動を行っている。その事例を、次の点線の枠内に示す。

事例8

2016年7月21日 9か月

朝の自由遊び中である10時、保育室内には人形が出されている。普段人形をしまっている片付け用の段ボール箱は、空の状態保育室内に置かれている。E児はこの段ボール箱を両手で持ち上げ、保育室のドア付近から部屋の奥まで歩いていき、そこに段ボール箱を置く。



【図15 下線：E児が片付け用の段ボール箱を運ぶ様子】

E児がこの探索行動を行ったとき、K児も同じ部屋内にいた。特にK児がこの様子に注目していたり、何かリアクションを起こしたりしたわけではないが、この様子を目にしていた可能性が考えられる。E児が探索行動を行っていた段ボール箱は、事例7でK児が探索行動を行っていた段ボール箱と同様のものである。さらに、E児とK児の探索行動を比較してみると、E児はこの段ボール箱を持って運ぶ探索行動を行っている。一方、K児は段ボール箱を押して移動させる探索行動を行っている。このことから、K児は他児に影響を受ける形で、片付け用の段ボール箱に対し、「片付け用の段ボール箱＝運べるもの・移動できるもの」という意味を見出してかかわっていたのではないだろうか。

K児は片付け習慣導入前から、保育者の促しによって片付け用のカゴ類に玩具を入れる片付け行動を行っていた。そして、入園当初から事例7の探索行動が起こる7月28日まで、K児は片付け習慣に関連した物的環境に対して探索行動を行っていなかった。これらのことから、K児は探索行動を行った段ボール箱を含んだ片付け用のカゴ類に対して「片付ける場所」という確かな認識ができていたと考えられる。しかし、他児の探索行動に影響され、「段ボール箱＝人形等の玩具を片付ける場所」という認識だけでない、K児なりの意味を見出したのではないだろうか。

3.2.3 考察：片付け習慣の導入と片付け習慣に関連した物的環境に対する探索行動とのかかわり

S児は、片付け習慣導入前、片付け用のカゴ類から玩具を取り出す姿は日常的に見られたが、片付け用の棚類・カゴ類自体へ興味をもってかかわる姿は観察されていなかった。しかし、片付け習慣導入後、片付け用のカゴ類や片付け用の棚類自体への興味を示し、主に片付け用のカゴ類に対して探索行動を行う様子が見られるようになった。探索行動の内容は主に片付け用のカゴ類に自分の身体を入れるというものであった。この行動から、片付け習慣として片付け用のカゴ類に玩具を入れるよう保育者に促される経験から、容器としてのカゴの存在に気付いたと考えられた。

一方、K児は、片付け習慣が導入されたことで、片付け習慣に関連した物的環境に対して探索行動を始めるわけではなかった。K児は片付け習慣導入前から、保育者の促しによって片付け用のカゴ類に玩具を入れる片付け行動を行っていた。このことから、K児にとっては片付け用のカゴ類は「片付ける場所」としての確かな認識があったと考えられる。しかし、片付け習慣が導入されてから1か月ほど経ったころ、片付け用の段ボール箱を押して移動する探索行動を行う様子が見られた。この行動から、K児は他児に影響を受ける形で、片付け用の段ボール箱に対して「片付ける場所」以外に「運べるもの、移動できるもの」という意味を見出し、かかわったと考えられた。K児のように物的環境に対して片付け習慣に関連した確かな認識がある子どもでも、物的環境に新たな意味を見出すこともあるのかもしれない。

4 まとめと今後の課題

本論文では、生活習慣に関連した物的環境に注目し、0歳児クラスの子どもの物的環境に対する探索行動が、保育園における生活習慣の導入とどのようにかかわっていると考えられるのかを検討した。

生活習慣が導入されることによって、子どもたちは保育者の援助を受けながら生活習慣行動を行うようになる。しかし、本研究においては、生活習慣の導入によって子どもたちが自発的に行うようになったのは、保育者が導入した生活習慣そのものではなく、自由遊び中におけるその生活習慣に関連した物的環境に対する探索行動であった。つまり、保育者が生活習慣を導入したことによって子どもがまず注目したのは、その生活習慣に関連した物的環境だったと考えられる。生活習慣の導入によって、今までは注目していなかった物的環境に目が行き、興味が芽生えたのだろう。そして、その物的環境に自分なりの意味を見出して探索行動を行ったと考えられる。

現段階では、本研究で観察された探索行動が直接的に生活習慣の習得とつながる道筋は明確ではない。しかし、生活習慣に関連した物的環境に対して興味をもち、自らかかわった楽しさが、今後の生活習慣習

得のベースになるのかもしれない。幼児期の子どもを対象とした片付けの研究では、片付け自体に楽しさが含まれていることが、片付けにおける積極的な取り組みにつながる事が明らかにされている(永瀬・倉持,2011)。今後、生活習慣の習得に向けてより具体的な援助を受ける段階になったとき、乳児期の間に見出した楽しさが、その生活習慣に積極的に取り組むことを促してくれるのではないだろうか。

本研究には、次の5点のような限界があった。①家庭における生活習慣の状況を考慮に入れられなかった。②観察期間が7か月程度であったため、子どもが生活習慣を習得するまでの観察ができなかった。③手洗い習慣・片付け習慣以外の習慣については検討できなかった。④観察の間隔が1週間と空いてしまい、子どもの様子を漏らさず、より詳細に記録することができなかった。⑤対象とした子どもの数が少なかった。今後は、これらの点を考慮し、探索行動と生活習慣習得とのかかわりまで考察すること、子どもに共通するプロセスや多様なプロセスを明らかにすることを課題とする。

引用文献

- 大戸美也子・柴坂寿子・狩野理恵・佐藤嘉代子・武居裕子.(2007). 2歳児の発達と学び—排泄行為の自律形成期における支援の指標を探る—. 日本保育学会第60回大会発表論文集, 684-689.
- 熊澤幸子.(2005). 幼児教育における健康および日常生活習慣の指導について. 學園, 776, 107-113.
- 佐々木正人.(2008). ～特別付録 DVD-ROM 動く赤ちゃん事典～アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察. 小学館.
- 柴坂寿子・倉持清美.(2004). お弁当ルーティンの変化—個人の事例から—. 日本保育学会大会発表論文集(57), 852-853.
- 柴山真琴.(2006). 子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—. 新曜社.
- 内藤由紀・山内淳子.(2012). 「片付け」場面における熟達した保育者の実践知. 山梨学院短期大学研究紀要, 105-114.
- 中田基昭.(2013). 子どもから学ぶ教育学-乳幼児の豊かな感受性をめぐって—. 東京大学出版会.
- 永瀬祐美子・倉持清美.(2011). 集団保育における遊びと生活習慣行動の関連. 保育学研究, 49(2), 73-83.
- 永瀬祐美子・倉持清美.(2012). 幼児は生活習慣行動をどのように受け止めているのか—集団保育の片付け場面への着目から—. 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 63(2), 179-185.
- 平野麻衣子.(2014). 片付け場面における子どもの育ちの過程—両義性に着目して—. 保育学研究, 52(1), 68-79.
- 平野麻衣子・小林紀子.(2015). 園の片付けにおける物とのかかわり—占有物・共有物に着目して—. 保育学研究, 53(1), 43-54.
- 藤本みどり・大戸美也子・柴坂寿子・狩野理恵.(2008). 排泄の自律形成に関する研究—トイレ理解の形成過程を中心に—. 日本保育学会第61回大会発表論文集, 342.
- 本間美保・坂本道子・渡辺美香.(1995). 子どもにとっての狭い場所. 日本保育学会大会研究論文集, 48, 290-291.
- 松田淳子.(2006). 子どもの生活と保育—「かたづけ」に関する一考察—. 実践女子大学生生活科学部紀要, 43, 61-71.
- 村上智子.(2012). 保育園における幼児の排泄自立とトイレ環境・排泄援助の影響. 東北文教大学短期大学部紀要, 2, 25-40.

付記

本研究はお茶の水女子大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。

謝辞

本研究にご協力いただきました保育園の先生方、保護者の方々、園児の皆さんに、心より感謝申し上げます。